

玉野市立学校適正規模・適正配置検討委員会 第5回会議 会議録（概要）

■日時 令和5年5月29日（月）15：00～17：00

■場所 市役所 大会議室

■出席者 ○委員 15人

金川 舞貴子委員長 栗林 太一郎副委員長

中島 正人委員 木津 直美委員 森 幸絵委員 大内 雄一郎委員 西宇可奈子委員

兼松 勲委員 今井 克則委員 木村 俊一委員 諏訪 祐子委員 濱松 正江委員

三浦 康男委員 浅浪 康延委員 近藤 奈々委員

○事務局 5人

玉野市教育委員会教育長 多田 一也 教育次長 小崎 隆 教育総務課長 琵琶 学

学校教育課長 的場 佳代 学校教育課課長補佐 高木文彦

教育総務課課長補佐 清山 智保

○教育委員（オブザーバー） 4人

教育長職務代理者 三宅 英次 委員 太宰 実千代 委員 二宮 崇 委員 横山 純子

■傍聴者 20人（うち議員 11人、報道関係者 1人）

## 1 開会

事務局： 要綱第6条第2項により、委員の半数以上が出席しているので、会議として成立することを報告する。

## 2 議事（要綱第6条第1項に基づき、金川委員長が議長となる。）

### （1）小学校の学校規模について

委員長： 前回の会議の最後に、会議を非公開にしなくてよいということが決定された。今回は、会議を公開するがよいか。（委員了承）

今回のゴールは、『小学校の適正な規模をどう考えるか』である。

前回、確認されたのが、学習指導要領が大きく変わっているなかで、子どもたちは教えられて受けとるだけではなく、子どもたちが集団の中で、各課題に色々な意見とか考えの熟知をされていく。そうした中で自分づくりを進めていく。学びのあり方が、大きく変わっている。それを進めていくためには、ある程度の規模の集団が必要である。その中で、こんなふうに頑張っている子がいるのなら自分も頑張っていきたいというふうに学んでいく力、非認知的な能力という言葉も出てきたと思う。粘り強く頑張るのかとか、へこたれないとか、いろいろなことに関心を持っていくとか、協働しながら答えのない解決を探っていくとか、そのためには相当規模の学習環境が必要ではないかという意見があった。

（少人数）ただ限られた人数の良さがある一方、お伺いの名前と顔がわかる中で密な関係が作れる良さがあるなか、やはり人間関係に起因するようないろんな問題が起こった時の逃げ場のなさといったようなデメリットから、ク

ラス替えができるということの一つのポイントとして規模を考えられる。中学校はどの教科も兼務とか免許外指導先生たちがいる。十分な子どもたちの学習を保障していく上ではデメリットがあるのではないか。教員の配置という観点で1学年3学級以上がよい。その他、先生たちが運営して行く上で、子ども達一人一人に自分たちの指導の質を高めるとともに、子ども一人一人に向き合う指導ができるために25人から30人の学級規模で学校規模が1学年3学級以上というところで中学校はとりあえず結論がでたと思っている。前回までのどんな学びが求められているのかというような議論を踏まえ、今回は小学校の適正規模についてご意見をいただきたい。

委員1： 私の周りで考えると、例えば地元のこども園で大体30人ぐらい1学年にいるが、小学校に入る前は30名で賑やかである。ところが小学校に入学するときに、30人が4つの学校に分かれる。いろいろな人との関わりが、こども園までは楽しくやってたのが、小学校に入って寂しくなっていくのが果たしてどうなのか。

今後いろんな方と話をし、社会の変化に対しての問題解決能力を付けていくということについては、小さい時から多くの方と関わって、間違っていようが正しかろうが色々あると思うが、そんな経験をしていくのは非常に大切ではないか。特にこれからの時代は。今世界にしても日本にしても起きていることは、私たちが小さいとき、学校で習ったことがほとんど通用しないようなことばかりが起きていて、それを子どもたちがこれから経験しながら物事を解決するためには、いろんな広く多くの方と関わるというのは子どものときの体験がものすごく大事になってくる。

そういうことを踏まえて考えると、中学校が3クラスであれば、やはり小学校も可能な限り3クラスぐらいということを考えてもいいのではないかと、私はそういう考えである。中学校を2つぐらいの規模にして、3クラスを維持することをずっとこの会で言ってきたが、やはり小学校もそういうふうに考えていった方がいいのではないかと考えている。

委員長： これからの時代に能力とか社会性とか集団のなかでどうやって行くのかという力を付けていくには、人との関わりが大切なのではないかという意見であったが、他の委員の方はどうか。

委員2： 1年2ヶ月前は中学校に勤めていた。小学校のことはよく分からないが、中学校、小学校とも同じと思うところもあれば、多少違うところもある。同じところとしては、小中繋がってるので国や県市から求められているような資質能力の向上については、中学生ほどのレベルは求められないが、発達段階に応じて求められる。違うと思うところは、中学校に勤務していた時は考えもしなかったことであるが、小学校はこれから生きていく上で本当に必要な力、基礎の基礎をしっかりやっていく。

例えば、小学校に入ってすぐ平仮名やカタカナ、算数で言えば足し算引き算などの計算をしっかり教え込んで、抽象的な考えから分析ができるように目指しているが、そういう人を育てていかないといけないと思う。先ほどから話に上がっている多様な考えに触れる機会ということでは、小規模校では1人1人の学習については、やりやすいということもあると思うが、多様な考

えに触れることによって自分との意見の相違を見つけて、自分の考えを振り返って考えて進めていく。それは授業だけではなく、子どもたちの規範意識とか協調性とかというところに大きく関わっていることだと思っている。

小学校では子どもたちがこれから生きていく上で必要な力をつけていくそのためにいろんな考えに触れていろんな行動を見て、それを自分の考えとして伝えて、それによって善悪の判断がついたり自己の尊重をしたりすることができたりすると思う。

社会の集団ルールを一つ一つ学んでいくといったところが小学校の基礎じゃないかと思う。それから人間関係の固定化については、小学校中学年くらいになると自分と誰かを比較するとか、周りの評価が気になるというような自我が芽生えてくると言われている。単学級の固定化された人間関係の中では自分の評価も固定化されてしまうので、中学校の議論にもあったように、自分を変えようというのがだんだん難しくなってくると思う。単学級での人間関係の深まりというメリットを生かしていける子どももいるが、しんどくなってくる子どもも少なからずいる。そうしたところで環境をクラス替えて変えるということは必要になってくると思う。

私自身は、できれば複数学級でクラス替えができるぐらいの規模が良いと思っている。

委員長： 小・中（学校）の共通性の部分、小学校での一番基礎だからこそ必要というところを話してもらった。

委員3： 私も、初めから言っているようにクラス替えが必要だということは、小学校でも中学校でも感じる。人間関係が固定化するメリットもあると思うが、もしそこでこじれてしまったとき、単学級であれば6年間、その先の3年間を付け加えた9年間がそこで生活しないといけない子どもたちのこのしんどさは大きいと思う。クラスを変えられることによって4月にはまた新しい自分に出会うことが子どもたちに出来ているのではないか。1学年に3学級以上あれば学年団として動くことがあると思う。そのときに担任の先生はもちろんだが、担任外の学年団の先生方がそれぞれ子どもたちに関わってくれている様子を身近に感じている。色々な先生から褒められる、色々な先生から注意を受けるということも、子どもたちにとってはとても大切なことではないかと感じる。

先日、小学校の運動会があった。全員で一つの大きな花を作って、波の作品をみんなで作り上げるというものだったが、その学年団の先生方が練習風景の動画を撮ってくれて、子どもたちみんなで見ると涙が出るほど感動したそうだ。その大きな作品を自分1人じゃできない多くの人数で、こんなに素敵なみんなが協力したからこの作品ができたんだということに涙が出たというのを子どもたちが話をしているのを聞くと、そういった経験を子どものうちにみんなと協力する、自分1人じゃなくて多くの人と協力するとこんな力ができるんだということを感じられるのは、とても素敵な環境なのではないかと感じる。

委員長： 学年団だからこそできる丁寧さやきめ細やかさ。一対一でやるきめ細やかさがあるかもしれないが、多様な子どもの個性ということを考えたら、複数の

目が複数で見て複数で評価をしたり、いろんな支援ができたりする可能性が開けるということがむしろきめ細やかだとか丁寧だということになって、新しい解釈を示してくれたと思う。

規模があることで、課程内人数以上の人数で作る圧倒的なパワーというところの良さを語っていただいたが如何か。

委員 3 : 各学年 1 クラスだが、同じことをやった。少人数だがそれでも我々保護者は感動する。もちろん多い方が絶対素晴らしいと思うが、少ない中でもすごく頑張ってみんなで息を合わせてやってるというのは、多くても少なくても、感動は同じだと思う。現状を考えると、複数の学級がある方がいいと思うが、例えば中学校は 3 クラス以上がいいとなると、小学校まで 3 クラスで合体していくと、もっと大きくなるのではないか。

委員 4 : 荘内が 1 小 1 中みたいな感じで一緒に上がるイメージになるのではないか。

委員 3 : 小学校は中学校より数が多い。前に市長が、小学校は地域性が強いのもう少し地域と話をしながらと言っていた。中学校が極論 2 校で 3 クラスずつになるのであれば、小学校はもう少し規模が小さくなるのではないかと思う。クラスが 1 クラスだと関係が固定されて、関係の補修が難しいという話だったが、最近、自分の子どもの学校で感じたことで学校側の対応がどうかと思うところが少しあった。

例えば、ちょっとということをきかない男子児童、目立つ児童がいて、その子が他の子にちょっかい出して、ちょっと問題になったが、その場で解決せずにお互いを手放して、片方は親が迎えに来てすぐに解決させなかった。喧嘩があっても、その場ですぐ解決させればどうってことないが、それを親が学校に来させないとか、先生が迎えに来させるとかして、何かその問題を引き延ばしにするのが、逆に関係修復ができなくなる要因を作っているのではないか。他の学校はどうなの分からないが、うちの小学校はお互い呼んですぐに悪いことした方にごめんなさい、すみませんみたいなことをしない。何かやり方にも問題があるんじゃないかと少し思った。将来的に人数が減って、学校が減っていくのは仕方ないと思うが、それまでの過程として、やり方があるのではないか。

委員 1 : 最初に発言したのは、規模というところだけで話をした。その配置をどうするかという踏み込んだ発言をしていなかった。3 クラスぐらいにしたときに 1 クラスを何人にするかによって学校の数でも変わってくるだろうし、場合によっては小学校も (1 クラスの人数が) かなり少なくなるような形でもいいのではないか。

委員長 : 言われるとおり、中学校の数や配置がまだ議論を行っていないので、それによって変わってくる。今のところ現実問題、小学校はかなり単学級化が進んでいる。3 学級以上という状態が、今の現時点で大規模の荘内や、田井でしか求められないというような気もする。やることは共通認識としてある。マンモス校にはならない。学習環境としては、ある程度の人数がいたらということぐらいまでしか今のところは議論ができていない。

委員 5 : 一番上の子が幼稚園の時のことになるが、小学校に上がった時に保育園と一緒にあって 30 人のときにすごく楽しいと本人がいった。中学校に上がると

きに2クラスになった。クラス替えが初めてとなる。この友達は仲良かったから一緒にクラスにしてもらったらいいなとか、一緒にクラスになれなかったとか、そういう会話ができたときに、人間関係を頑張ってるやってるなというのとはすごく感じたことがある。

次男は、完全複式を経験した。幼稚園から小学校で20人のクラスになって、中学校では50、60人ぐらいで2クラスできた。今度高校になってその時に、とても人数が多いと言った。

一番下の子の時にはクラス替えがずっとなくて、固定された友達のままだったら新しい友達を知らない。最近インスタとかゲームなんかでもチャットしてるので、他のプールとかで知り合った友達もできているが、もう少し学校でも多い人数で遊ばせてあげたい。3クラスも4クラスも欲しいわけではないが2クラスぐらいあって、20から30人ぐらいの子どもたちが2クラスぐらいでクラス替えもしながら友達関係を作れる環境にしてあげたいと思っている。

委員長： いろんな規模で子どもたちが一生懸命サバイブしてそこから学んでいくことを味あわせてあげたいということだが、如何か。恐らく人間関係のいざこざがないことが望ましいというより、その中から何を学んでいくか、どうやって壁がある中で、そこをどう盛り上げていくかというところで。

委員6： 今回は小学校の規模ということで、委員会の中でこの10年20年先の未来のことを考えるというのを主軸に備えて動かないと駄目ではないかと思っている。その中で小規模校、大規模校様々で、人数によってその場その場で多分対応はできると思う。子どもたちの笑顔が小規模だったらいいのか、大規模だったらいいのかというところではないと思う。

しかし、これから10年でほとんど複式になるのかな、大規模校以外は。その中で子どもたちの選択肢は正直狭まると思う。その中で、1クラス2クラス3クラス30人ぐらいで何クラスというのがあるが、中学校もそうだが小学校もこれから先14校を考えていく上で、僕の中では、義務教育学校というのがあるが、10年、20年先のことを考えるのであれば小学校の方もそこら辺もちょっと配慮しながら考えて、これも地域のコミュニティとか様々な意見があると思う。だからすぐに決まるものではないと思うが、その主軸をまずは決めないと。あくまで10年、20年先の未来の子どもたちの人口の予想はある程度はできている。そこに向けてみんなで話し合いをどんどん進めていった方がいいと思う。

委員長： 諮問をいただいたのも複式が進んでいくということに対して、これから求められる、これからの時代を生きていく力を育てるうえで適切かどうかということである。

複式になっていくと選択肢が狭まっていくということを考えたら一定程度のいろんな選択肢を考えたらどうかという一定程度の規模がということだろうか。大体一定程度の学級でクラス替えができる、選択肢が増えるというのは確かにある。一定程度の規模でということでは話がまとまりそうだが、それでよいか。

委員 7 : 今後のことを考えると大規模で人数も揃えて何でもできるようにやっていけばいいと思うが、小規模ながらの良さというのは忘れてはいけない。

地域の方々の支えや、少ないながら問題があったらみんなで考えて一人一人がリーダーになるチャンスもあるだろうし、そういった部分で自立している力が小規模にはあるのではないかと考えている。

勉強に関して大人数でやっていけばいいなというのはある。インターネットが普及してタブレットができるようになるのであれば、遠隔であってもスクリーンに出してやればいい話であって、別に人数を出すということも必要ではない。1クラス5人だが、男女関係なく、すごく騒がしい。本当に仲良くきてるんで、その中の絆というのが、大規模校ではないなと感じて、うらやましいなと特に感じた。

その中でも男女関係なくやっていくという部分では、公平不公平がない。互いが尊重し合って、それを中学校になって、改めて大人数になるが、対応できる力というのは、子どもは絶対持っていると思う。大人が心配することでもない。いざこざがあったからクラス替えができないとか人数が少ないからクラス替えができないとかでも、子どもは考える力を持っている。そこでできなかったら先生方とか、保護者が手を差し伸べてやればいい話なので、最初からそれを心配してまですることではないと考えている。岡山市の方で、特別指定小規模小学校選択制、岡山市であれば学区限らずそこに行きたいと、そういうふうな制度ができるとあった。そういうことを玉野市もしていけばいいと思う。小規模の小学校は残しつつ、保護者や子どもが決めていけばいいと思っている。

委員長 : 小規模だからこそそのメリット、例えばタブレットでもインターネットで学習できるんじゃないか。その教育効果が同じように大規模と同じようになるのかもしれない。小規模ということも全面的にするわけでもないかもしれないが、県としてその予算を残した学校というのも選択肢としてありえるのではないか。小規模であることを生かしつつ、特色のあるカリキュラムを組んでやっていくということで、その選択肢も検討できるのではないかという意見をもらった。例えば小規模予算についてでもその選択肢についてでもいい。ご意見いただければ。

委員 8 : 大規模にすることが正しいことではない。岡山市がこうだから、こっちが正しいこっちが悪いというのはない。

最近は大変な時代だと思う。多様なものをなくしてしまうというのは時代に逆行していると思う。少ない学校が適正な子どももいるし、大人数が適正な子どももいる。いろんな子どもにいろんなことに対応して、多様性を持って教育をするというのが時代にあっているのではないか。子どもたちの数の問題ではない。大人数がいいこともある。隠している、今の学校の先生の教育は。文科省の指導かもしれないが、見えなくしよう見えなくしようとして、それで問題は全然解決してないのに時間は過ぎていくというのが多いと聞いた。クラス替えができるかは、それと全く同じで隠せばいいのではないか。そうではなくて、みんなで解決していこうというのであれば、小規模校でなくなればこんな問題が起っているか、みんなで考えて、その子のお話をち

やんと聞いて。

勝負というのは特に小学生のうち、失敗して当たり前。失敗して失敗してまた失敗して。それでどんどん教えていってあげる。失敗せずに教育はできないと思うので、そういう意味では隠してしまうのではなくて、何が言いたいのか、自分たちは何がしたかったのか、自分たちに考えさせる教育というのは、小規模校の中から生まれてくる可能性があるのではないかと。

委員長： 失敗して学ぶということは、おそらくどの委員さんもこれからの教育に求める。そして、みんなで解決していくというのはおそらく一致しているのではないかと。色々な失敗や知恵を出すために、色々な支援に慣れてくるということで行っていかうと言われたのかな。小規模校もありつつ、一定規模の学校もありつつ、多様な種類の学校があってもいいのではないかとという意見であった。

委員4： 皆さんの意見を聞いていると自分の意見がゆれるが、最初から感じているのは、複式学級というのはデメリットが多い。解消していくのは皆さんの意見でいいと思うが、子どもが小学校一年生になり、1学年全校1クラスで百人ぐらいの学校に入ったところなので、自分の経験としては、複数学級あるべきなのかどうかといったところでは、自分自身が子どものころは複数学級あったのでクラス替えが楽しみだったとか、人間関係のリセットとかもあったと思うが、自分の子どもを見ていると、そういった経験がなくて、そここのところの判断が難しいなと思っている。

中学校に比べて小学校の目的というのは、基礎学力であったりとか、生活習慣だったりも含めて、身に付ける場所だと感じている。そのためには中学校に比べて本当に多くの意見、何百人単位とかの意見に触れるという場までいかななくても、いろんな意見に触れることが悪いことではないし、基礎学力とか生活習慣をつけるという目的を考えると、中学校に比べて小規模のメリットというものもあると感じている。

最初に配られた適正規模化計画素案に、現状の小学校の学級数 20 年後ずっと1学年1クラスが維持できる学校は3校ほどで、今の大規模校以外の学校というのは、10 年後 20 年後の長い目で見る必要があるが、1学年1クラスぐらいの規模だったら玉野市において現実問題を考えてというのと、あってもいいと感じている。

理想と現実があると思うので、適正規模というのは理想だと思うが、廃止というのは現実問題も考えないといけないと思うし、先ほど言われた小規模を選択肢として残すという形としては、1学年1クラスが維持できるぐらいの規模だったら選択肢もありと感じる。あとは今まで言ったことと矛盾することもあるかもしれないが、1クラスの生徒数も考えるべきだと思う。1学年25人までにするとといった選択ができるのであれば1学年30人で2クラスになる。それがいいのか悪いのかというのは皆さんで議論するべきだと思う。そういった形で複数学級を生み出すということも考えてもいいと感じる。あとはもちろん子どもたちの教育であるとか、教育の資質が第一だが、財政面についての判断というのが自分にはつかない。この案にもこのぐらいの学校数にすればこのぐらいの予算になるというのは書いてあるが、目標みたいな

のがわからないので、そういう面も考えないといけないと思う。

委員長： 先ほどから小規模、小規模校の議論になっているが、実際問題はそのままですと、複式が増えていく複式化していくということに対して、この傾向をどうするかということで諮問されているので、皆さんがおそらく言われている小規模校を特認しようと思ったら、今のままでは複式になってしまうので、やはり適正規模を考えるにしても、適正規模を集めないというようなことで、複式の解消ということは共通認識ということでしょうか。現実問題、複数あればすごく理想的だけれども、単学級というのは最低限維持したいということだろうか。できれば2学級に。

委員8： そこは教育効果を前提に話しているのか。

委員長： そうだ。教育効果を上げることを、学級規模という観点から検討するのがこの委員会の役目である。学習効果を高めるために、規模という観点でいくと、どれぐらいがいいか、今まで出てきたものが出せないというところが一つの基準になった。

委員8： 諮問されているのはそういうことか。

委員長： 複式は解消していく方が学習効果はより高くなるのではないかとこの委員会の基本方針としている。まだ小規模と複式と単学級が残った議論になっているのだろうか。あくまでも複式化していく中で単学級規模、もしくは2学級くらいは維持するという方針である。

委員9： 小規模校のメリット、それから学校を複数、3クラスにしていくメリットというところもそれぞれの視点で皆さん述べられているので、その視点に立てばこれは正しいことだと思った。ただこの問題は様々な条件が相まって議論していて難しいと思う。一つテーマで上がってきたのは子どもの学びである。子どもの学びについては多様な学び、先生から教えてもらうというのではなくて協働的な学び、課題解決をみんなですていくことになってきているということで、ある程度の人数が必要であるということだ。それから、人間関係の固定化の話がでた。

学校運営をしている者としては、先生に関することも含め、財政も関係ある。学校は、建物の耐震化は進んでいるが、トイレなどは昭和のままである。私達が小学校の頃から、そう変わりはない。そういう中で、玉野市の規模でこれだけの学校の施設を全て充実していくのは難しい。子どもたちのための環境づくりのためには、財政面とか、お金の問題ということも考えていかなくてはいけないと思う。教員の話もあったが、いろんな先生が関わっていく。この先生とは関係が悪いけど、この先生は私のことを評価してくれるというような、多様な大人との関わりはある程度適正規模が必要である。それから小学校で躰（しつけ）をしていく上では、子どもが少ない方がしっかりできるのではないかと。本当にそれぞれの理由があると分かった。中学校でも小学校でも社会性を付けていくこと、そして規範意識を身につける集団の規模というのは、その中の条件の中でも非常に大きいところなのかなと思っている。具体的にはいろんなゴールイメージを持ちながら、色々考えているが、中学校は2校というような案が出てきた。自分の勝手なゴール目標であるが、中央、西、東に3校、ただ東は人数が少ないので、小学校と連携した義務教育



学校にして多様な学びをしていくなど自分の中でイメージを持ちながら考えている。

小学校の数の問題については、中学校区がある程度具体的に決まっていなくて難しいと思った。小学校の、例えば中学校2校になるか3校になるから、2校になるならここに含まれる小学校はある程度適正規模な人数を合わせるためには、どこを統合していくのか。

具体を考えていく順番としてはまず中学校の2校もしくは3校をどうしていくか。それに適正規模が保てる小学校の組み合わせをどう考えていくかというところを具体的に考えていかななくてはいけない。もちろん小学校の地域性の部分については同感である。小学校からうちの中学校に上がってくる地域の子どもも本当に地域が好きで、横断歩道で地域の人車が止まってくれたら頭を下げて通る。地域が好きなんだと思うので、地域との繋がりは大事にしていければと思う。これは学校が大きくなったとしても、例えば美咲町が旭学園義務教育学校を作ったが、この校舎の中に住民と交流するための地域ふれあい室みたいなものがあるそうで、地域のふれあいについては学校の運営のやり方、学校の工夫次第で、地域とつながっていけるやり方はあると思う。

委員長： 規模・配置を考える際、大きな方向性としては、もう前から確認しているが、社会性、集団規範などこれから求められる能力をどう付けていくかという教育上の観点が第一にきて、そこから地域コミュニティの一つの基盤としてつないでいく学校というところで、全体の規模と配置を考えていく。

学校が地域のそれぞれの良さを大事にした教育活動を必ず考える。その辺は最初の方もみんなで玉野の子どもを育てるんだというような意見があった。それぞれの良さもありつつ、5人とか6人の子どもがその地域のことを継いでいくのではなくて、複数の方が複数の地域の良さを知っていくことで、玉野全体が盛り上がっていくというような発想が大事なんじゃないかという意見をもらった。学校が変わるんだから地域も変わっていかないといけないというご意見をもらった。そういう点では、自分が地域を大事にしつつも、全体を見る視野を持ちながら盛り立てていくところで学校ができること、地域ができることで残せることかなと答申の中に盛り込んでいけると思う。中学校2校3校あたりを基準に、地域性だったり通学のいろんな安全面だったり考えていっている。そこから波及して小学校を考えるが、小学校は規模に関して複式は解消するという方向で、願わくばクラス替えができる規模で単学級の規模はなくしていくところで一定の共通理解ということでよいか。

委員3： クラスの規模は、玉野市は35人学級だと思うが、少し多いと感じている。25人から30人ぐらいがいいと感じる。

委員9： これは「公立教育諸学校の学級編制の標準に関する法律」というのがあって、35人という枠が決まっている。全体の人数が例えば40人ちょっとならば、標準を超えるので分けることは可能である。例えば80人だった場合、40人、40人に分かれてしまうと、これは一番多いケースだが、法律上そうなることもある。

委員3： それは玉野独自で変えることはできないのか。

- 委員 9 : ある程度、弾力化とか学校裁量でいくらかはできるが。
- 委員 2 : 中学校は 40 人である。
- 委員 9 : 1 年生は弾力化でできる。2 年生、3 年生はちょっと難しい。
- 委員 2 : だから中学校は 3 クラスで 120 人。小学校は 4 年生まで 35 人。
- 委員 4 : この会議が発足するに当たり、最初の方で玉野市として独自の方針を出すことも考えられるようなことを確かアンケートの回答とか、そういう意向を見たような気がしたが、市としてクラスの人数を独自に持つということは難しいのか。弾力化とかじゃないとできないことなのか。
- 委員 3 : 検討委員会の設置目的が、一応市立小・中学校の適正規模および適正化について検討し、子どもたちにとってより良い学校教育環境を整備し、学校教育の質の維持および向上に取り組むためとなっている。クラスとかの人数も法律で決まっていたら玉野市で予算を取ってできるのかなと思う。
- 委員 10 : アンケートの中に学校がなくなったら地域が廃る、その通りだと思う。それだけ地域というのは、子どもたちが色々中心となってやっている。そういうところで重要な役割を果たしている。
- 学校がなくなったら地域が衰退するというのは、今までの地域のやり方では当然そうなる。だから学校が統廃合でなくなっても、今度はそれをどういうふうに地域が答えていくか。地域のあり方にも関わってくると思う。子どもたちのために一番いい配置になった場合には、それを受けて地域がそれじゃあこうしていくかという議論をして行く必要はあると思う。
- 地域というのは、とにかく今までと同じ方法でやったら駄目である。それから、ここにいる皆さんは本当に小規模校だからというメリットはよく知っていると思う。それを小規模だからというのを否定しているわけじゃないと思う。できれば小規模校でも色々やっていきたい。今議論があるのは人間関係とかを考えた場合に、あるいは教育の資質向上という意味では、小規模校よりは人数が多い方がいいのではないかと思うし、それはそれで本当にいいことだと思っている。とにかく子どもたちのために適正な規模を考えていただき、それによって地域で従来と同じような方法ではなくて、色々地域のあり方も考えていかななくてはいけない、変えていかななくてはいけないと思っている。
- 先生が子どもに教える、それだけであれば小規模校も中規模校も大規模校も同じだと思う。今は本当に教育が多様化してきてそれだけではない。だから、そういう意味では本当に考えなくてはいけない。複式というのは仕方ないんだけど、効率は確かに悪い。子どもたちにとってもマイナスになるのが大きいのではないかと思う。何学級というのはわからないが、クラス替えができるような規模というのがいいのではないか。今度はコミュニティのあり方を考えないといけない。そういう順番だから、コミュニティが前面に出るよりは、小学校、中学校のあり方を考えて、それによってコミュニティはどういったのがいいかなというのを考えていこうと思っている。
- 委員長 : 地域としてできること、コミュニティの範囲のあり方あるいは関わり方というところを提案してもらった。

- 事務局： 先ほど 35 人学級の話があった。1 学年 35 人学級と国・県から決められたものであるが、それによって県が職員を配置している。例えば昔だったら 40 人学級であったが、それを玉野市は 35 人学級にして、早くからやっていたところがあるが、それに合わせて玉野市として教員を確保できれば、そういった形としての対応もできる。今 35 人学級の話で、30 人にするといった場合には、玉野市で財源を用意して、先生が確保できれば、考えれなくはない状況である。答申の中で、そういったご意見をいただけることは構わない。
- 委員長： 40 人になってしまうと、あまり望ましいことではない。もし可能であればその規模での学級のクラス数ができるということが理想といったところだ。答申としての規模は出せると思う。
- 委員 4： 今の中学校に関しても同じと考えてよいか。中学校も 20 人、30 人でもいいと思う。
- 委員長： 小学校の規模がそのベースになる要素、考え方が共有できたところで、先ほど中学校は 1 学年 3 学級という規模で考えた時の何を大事にしながらどう配置を考えていくのかというところの議論を、次回も含めてやることになる。そこに付随して小学校を中学校の議論より先にしてしまうというのもいいと思うがどうだろうか。
- 委員 8： 少人数が駄目で大人数がいいというエビデンスはあるのか。
- 委員長： 大人数ということの議論にもなっていない。少人数の良さがある、でも複式は解消した方がいい。財政面あるいは教育の観点で、少人数で大体 25 ぐらいから 30 人でクラス替えのメリットをとということで、大規模を皆さんが推奨しているわけではない。
- 委員 8： 人数が少ない学校と人数の多い学校で成績が変わるというエビデンスはあるんですか。先ほどから聞いていると人数少ないのはだめなのかと思う。
- 委員長： そこはなかなか難しく、大規模だから小規模だからというどっちもはっきり言い切れない。いろいろな要因が関わりすぎる。ただ小規模であるといいのではないかという研究データは多いような気がします。
- 委員 9： そういう学力に関するデータは本当に人数によってよりも全年代によって違うし、市によって違うし、場所によって違うし。
- 委員長： 教科もどこを扱うときにどういう規模のどういう活動をしたらいいかによってもだいぶ変わってくる。その点で選択肢ができるというのはある。例えば、この実験するとき、複式でこの学年とこの学年で一定時間が必要なので活動できないというようなことが、一定規模あると少人数もできるし、複数人数もできるし、複数グループもできるから、教材の中身、教科の内容に合わせた学習スタイルの選択肢を先生が専門性を発揮して使うことができる。効果的な学習の選択肢が増えるところを言われていると思う。
- 委員 8： 結果として子どもに差が出るんですか。
- 委員長： それはそういうふうを目指す教育に対して、今までのような複式であれば、社会性を身につけたいとかいうときには人数が必要だというのは一定程度あるんじゃないか。やっぱり選択肢があることで伸びるであろうということ。教育効果は学力という意味ではない。色々な要素が関わるので非常に難しい。
- 委員 8： 諮問されたということは、その中で、こういう効果があるのでこうするとい

うならばわかるが、効果がないことについてこうすると言われても、効果がないと何も答えられない。エビデンスがあるのか。

委員長： 大規模も小規模もそれだからという単純な話では言えない。

委員 8： 委員会の答申としてどういう回答するか重要になってくる。例えばお金がないと言われるとそうなのかと思うが、教育効果がないと言われるとそうじゃないだろうという話になるのではないか。少人数より大人数がいいんだと言いつつ切られると、学校の先生も立つ瀬がないと思う。

委員長： 大人数の方がいいというより、一つは先ほどから出ているように、これから求められる協働的な問題解決をしていく、社会性を身につけていく、集団規範を身につけていくときは一定数が必要だと。

世の中に必要な求められる力は変わってくるというところから、そういうふうにしていきたいという意向なんだと思う。あるいは先ほど選択肢が生まれる、小規模がいい大規模がいいと言ってるわけではなくて、内容に応じて個別最適で協働的な学びで主体的対話的で深い学びを実現していきたいという方向を考えたときに、いろんな学習活動がいろんなメンバーでできるという選択肢を学校が備える、まさに多様な学習活動ができるというのがいいのではないか、目指したい教育に対して効果的なんじゃないかという提案を考えをということである。エビデンスがあるからこれはこういうことができるということがここでできるわけでは決してないと思う。

委員 3： (検討委員会) その設置目的に、「子どもたちにとってよりよい学校教育環境を整備し、学校教育の質の維持および向上に取り組むため」と書いてるのに、何のエビデンスもなく、そうした方がいいんじゃないかでそうするのは、正直そういうふうな方向になっているなというのはずっと感じていて、学校の子どもがどうかは正直わからないが、何となく複式学級は解消した方がいいのではないかという思いはあるが、子どもも少なくなっているし、良さはあるし、先生も少ないしで決めると、それは本当に子どもたちにとってより良い、大人たちにとって都合の良いみたいな意味にもとれる。

このまま複式は解消して、中学校 3 校にしてという方向に、この委員のメンバーで答申が決まったというメンバーの 1 人として名前が残るのかと思うと、方向は違う意見を出してしまう。本当に子どもたちにとってより良い教育を突き詰めていく、それは例えば玉野市の財政があろうがなかろうが、その方が絶対こういうことだからいいんだということを言い切れないうまま、漠然として、例えば、すごい少ない学校の人数の子どもさんがもうちょっと人数だったらもう何もできないから何とかしてほしいと訴えかけるお子さんがいれば、うちみたいにこの人数でよかった、もう毎年クラス替えがなくて、この人数がすごい仲良くて、この人数だったから私学校に行けるようになったという事実もあるんで、それは何か本当に子どもたちにとってより良いということが分かるものであれば、そういう意見を答申として残してもいいとは思う。本当にいいのか悪いのか分からないが、これがそうだからというのにはちょっと無責任かなと感じている。

委員 7： 複式学級を解消したいというのは、学力が低下するというのはいか根拠はあるのか。アンケート等でも再三、複式学級を経験された方は別に何か不憫で

はないかという意見もあったし、フィンランドの方では、複式学級を積極的に行っている。そっちの方が学力は向上していると実証されてると書かれてる。それを何か違うみたいな感じで言われてるのは、ちょっとおかしいんじゃないかと思う。

委員 9 : 複式だから駄目というようなことはない。

ただ、1年生と2年生を教えるときに、教員の立場として、1年生のことを教えてる間に2年生のことは自習になる。2年生の事を教えている間、1年生が自習になる。だから教員から知識や技能やそういうものに関わってもらえる時間は、複式を経験した教員に話を聞くと半分しかできないと言っている。フィンランドのように、自分のやりたい勉強を主体的に進めていくというスタイルが幼少のときから根付いていれば可能だと思う。日本は小学校に入って言葉を覚えていこう、計算を覚えていこうとなると、時間が半分ずつになる。

それから学習というのは系統がある。複式であがった場合に、例えば3年生と4年生が複式になった場合に、3年生から4年生になったときに4年生の内容から入る。だから3年生の子は1年・2年とあがって3年になったが、3年の子が4年にあがってるからひっくり返る。社会、理科については4年生の学習を3年生に教えている。次に、その3年生の子が4年生に上がったときには3年生の学習をする。系統がひっくり返る途中、これは子どもたちに順序立てて学習を進めていくときに、指導してる教員としては嫌だというのは聞いた。せっかくカリキュラムがこの順番で学んだら知識がついてくるとなっているのにとというのは聞いた。

委員 7 : 予習と復習という考えであれば、そういうのもいいかなと思う。高校の勉強だったら1年生が3年生の勉強をしても分からないが、小学校の段階だったら、塾とか行って先のことを学習して、復習してみたいな感じでそういう捉え方だったら問題ないんじゃないかなと思う。

委員 3 : 結局、学力は関係ないのか。複式だろうが、複式でなかろうが学力が下がることはない。

委員 9 : エビデンスということは、色々な条件があるから、一概には比べられない。これまで何回も検討委員会をして、本当に子どもたちにとってより良い教育環境を考えて皆さん意見を言ってきているので、教育の質は高めるためにはどうやっていかないかということを経験かけて議論してきた。ここで大人の都合でそれを決めるということではない。今までも4回本当に皆さんで審議をしてきたことが飛んでしまったので、ここはちょっと違うのかな。より良い環境を、質を高めるというその最上位の目標に対して皆さんがいろんな立場で議論をしてきたので、そこをどう取りまとめるかというのが難しい。

委員長 : 学校現場の立場から複式の難しさを話してもらった。その教員の確保というところも非常勤を活かしていくことが必要になってくる。

委員 1 : 現実を考えると、ある程度の規模で学びたいという子どもたちも増えているし、そういう選択をしている親もいる。アンケートの結果にも出ているということを見ると、今までと同じような考え方でこれからの玉野市の学校の数を考えるのではなくて、変えていかないといけない。そうした中で冒頭に

言った中学校は1学年3クラス規模であるとか、小学校についても3クラスぐらいがいいのではないか。

委員3： 後閑小学校の保護者の方から聞いたが、もしその子が転出する可能性があった場合、その先での学びに支障があることと、また逆に複式学級をやっている学校に転入してくる場合も不具合がおきることも聞いたので、やっぱり複式学級でなく通常の3年生は3年生の教育、5年生は5年生の教育を受ける環境の方が望ましいと考える。

委員4： エビデンスと言われているが、そういうものがあるのであれば、それを最初から選ぶと思うので、なぜこういう検討委員会が玉野市が設置したのかということ考えたときに、玉野市が目指す教育というのも最初の方に教えてもらったし、実際、私達子どもを持つ親や、先生方、今玉野市で携わっているメンバーが集まって発言することは実感のある意見を求められると思うし、国でこういうデータがあるからというのではなく、自分自身が感じていることを意見として述べた上で、その中で複式がなんで駄目なのかということが共通認識であると言ってしまったが、そうじゃない人もいる。

複式の学校を実際に見学させてもらい、知り合いからこういう複式の経験をされている方の意見を聞いて情報を集められた。最終的には答申という形でまとめるけど、そのなかで違和感を感じたら、今のように発言されたらより議論が深まると思う。流れていかないというのは大事なことなので、貴重な意見と思う。証拠みたいなものとか、そういうものを求めるよりは、自分たちが考える理想に沿って考えることしかできないような気がする。

学力というのがどういうことなのか分からないが、例えば学力テストの結果を求めているんだとしたら、それはもちろん自分の子が100点取ってきたら嬉しいが、そうじゃないものを求められているのが今の教育であり、玉野市が目指している教育だと認識していると思う。それはすごく分かりづらいものだと思う。この人は、多様な意見を持つてる人とか、この人は固定化してる人みたいなことはすごく分かりにくいし、それはそれぞれ違ってそれでいいというところもあると思うので、証拠や根拠を求めるよりは、自分たちが目標や理想に向かってどうするのがいいのかというのを考えることしかできないと感じる。

委員8： そのエビデンスがなくても、こういう方がいいんじゃないかということで、皆さんが考えていこうということであれば、一番最初に言われたように玉野市の教育目標はどうするのかというところに戻る。皆さんはどのような希望があるのか。

先ほど、効率化という言葉が出てきたが、教育は効率でするものなのかなと思う。玉野市はどういう教育を子どもにしたらいいいのか。一番最初に話をしたときに、今玉野市から子どもたちがどんどん流出してしまってる。次の世代の子どもたちはみんな県外に出て行って帰ってこない。子どもたちのことを考えるのはわかるが、未来をどんな風につくっていくのか疑問になってきた。楽しく住める玉野市であって欲しい。

委員1： 私も玉野市で教育を受けて東京へ出て、玉野市へ戻ってきた人間だ。さっきの効率という部分については、その学校の授業である時間の中で教えないと

いけないという意味での効率だと思うので、変な意味での効率はないと思う。

委員長： 効率というのは、あくまでもこれから求められる教育、育みたい資質を育てていくという点で、より良い無駄のないベストな方法という点での効率ということである。何をさておき効率性を重視してという話ではなかったと思う。色々な意見が出てくるのはとてもありがたいことである。

大きな方向性として、単学級で一定程度の選択肢があるということでクラス替えができることを大事にしたいが、全体的に一律にそれを適用するのではなく、小規模の特認という選択肢も考え得るというような程度でまとめるという形もある。

財政の面も当然考えていかななくてはいけないと思う。これから求められる教育に対して投資をしていくとか、施設設備をもっと充実させていくというような形で、今のまま維持していくと最初に説明があったように、古い校舎を維持していくだけでコストがものすごくかかるという現実はあることは間違いない。

委員3： 先ほど言われた複式だと転出したときに引き継ぎが難しいという話があったが、後閑小学校に行ったときに、校長先生から話を聞いたときは、一応今の学校の先生と転出先の先生とうまく連携をとって、上手にやっているということを行っている。先生が大変だということだったが、校長先生が言うには人数が少ないから、先生も早く帰れるというメリットがあるということを行っていた。

予算とか財政とかがあるのはわかるが、子どもたちにとってよりよい学校教育環境を整備し、教育の質を維持向上するというのが、財政も絡んでということなのか。子どもたちにとってよりよい学校教育の環境を整備したり、質を向上させたりするのは、お金が絶対要ると思う。前にPTAの会長会議に市長が来たときに、玉野市の予算との関係で、教育委員会と予算を決めるところという縦割りじゃなく、横の繋がりでやってほしいと言った。子どもたちにとっての良い学校教育環境整備して、教育の質を向上させるという目的だったら、我々が予算を考える必要があるのか。質や環境を整えるのならこうしましょうというのもある程度打ち出して、それに予算がついてくるのか。予算を我々考えて意見しなくてはいけないのか。考えずに子どもたちのためだけを考えて、意見すればいいのかで違ってくると思う。大人なんで、ある程度お金のことはわかる。玉野市の先々のことを考えたら、よく言われるように、学校を集約していくというのが大切だと思うが、その質の向上と環境整備とかいうことだけを我々で考えて答申するのであれば、切り離して考えるべきなのかと思う。

委員長： 細かく計画を立てるということではないが、よりよい質の高い教育を目指そうと思ったら、それを実現していく条件がいくつかある。それが先生たちの働き方だったり、先生たちが授業研究して能力を高められたりするとか、忙しい中、子どもに向き合えるとか、そういうことも含めてである。そうすると、もっとこういうところにお金を投じた可能性も考えられるんじゃないかと考えていく条件の一つとして、財政の問題というのはやはり切り離せないと思う。それは検討して良いと思う。

あくまでも先ほどからずっと皆さんが言っている質の高い教育を実現するための、環境を整備するための観点の一つには、財政は上がってくることだと思う。実現していくためには当然お金も人もいる。そこは考えないといけない。考えて発言した方がいい。

委員 9 : 財政のことを考えずに検討していきましようと言っても。

委員長 : 絵空事になってしまう。

皆さんに今まで出してもらったのが、教科指導だったり学校生活とか指導の面だったり、学級経営、学校運営の問題。そしていくつかの観点でのメリット、デメリットを想像して考えていただくことである。

委員 8 : 財政運営はどのぐらいの幅があるのか。財政運営をどれぐらい頭の中に入れておかないといけないかわからない。

委員長 : 少なくとも事務局が、去年の段階で資料として出していただいたもので行けば、これぐらいの試算になるというものである。もちろんたくさん転入してくると流れが違ってくる。

委員 8 : それ、全部ベクトルが下に向いてるときの試算だろう。

委員長 : 適正な計算手法での試算である。

委員 8 : これから効率、効率で玉野市が運営していくというのであれば、実際、それを実行すれば教育の費用も減っていくわけだから、グラフが右肩下がりになるのは、現状を表してるわけで、将来どうなるかは分からないと思う。これからその市議会がどういうふうに判断し、投資していくのかということによって、かけられる予算も変わってくるということになると、学校例えば。

委員長 : 財政に関しては、こういうことを目指していきたい、そのためにはこういう要件が必要だ、なので市長部局とも連携しながら検討していただきたいという要望を伝えるぐらいのものになる。教育にちゃんと力を注いで人が入ってくるとか、教育で魅力があるように、市長部局や地域ときちんと連携しながら進めていってもらいたいということ、附帯事項でつけることで、それは反映することができると思う。

理想としては複式より一定のクラス替えができる人数で1クラス、25人、30人ぐらいの規模がよい。中学校と絡んでくるので、一律に全部そこで切っていくというよりは、小規模の良さを活かした選択肢も考えられる。それもデメリットメリットあると思うので、これから具体的な配置の方策になった時点で検討していかないといけないところだと思う。これをおおよその方針としてよいか。複数のクラス替えができる一定の学習活動ができる、複式は解消したいという方向、ただ一律ではないというところ、という感じでよろしいでしょうか。複式に関しては難しさがある。複式を解消するというものの市の意向があると思うので、ちょっとそこはまた検討が必要なのところがあると思う。

委員 10 : 算数、数学については、よっぽど教員の力がないと、段階的に上がっていくわけですから学力はなかなかつかない。例えば社会科の地理なんかは、関東地方のことがよく分からなかったけど東北地方のことはよく分かる。これはいける。ところが、算数の場合は1、2年生で習ったことが分からないと3年生4年生では全然ダメだ。そういう面では複式は大変である。指導してい



る先生方には、頭がさがる。

委員長： 複式で系統性が途切れていくことが難しさと思うし、玉野の先生が今の条件で、最大限のフォローをしながら最大限の教育効果を上げるべく頑張られていることが、視察をして非常によく分かった。だから良い面が非常に伝わってきたところではあるが、教員の確保の問題、これからの若手が増えていく。複式が指導できる教員確保などを考えたときには、持続可能性、10年、20年経ったときのことを考えたときの難しさというのは、私も定かではない。先ほどから繰り返しになるが、およそ20人から30人ぐらいの規模であれば、クラス替えができる規模を理想とするということを大きな方針として、小学校の規模も一律にというよりは、小規模の可能性も少し探っていってそのメリットデメリットを配置の中で考えていくということによいか。

(委員了承)